

## 教育実習生の音楽行動

野 上 俊 之

本学の学生諸姉が学外で行う幼稚園教育実習は、1984年にスタートした。当時、文部省は教員養成と免許制度のあり方について、教育職員養成審議会に諮問している。そこでは、幼稚園教諭としての資質向上を図るため、実習の単位数が6単位に増えるなどとしやかにささやかれていたもので、本学としては、附属幼稚園での実習を補足し実力を養成しなければならないとして、学外で実施することになったのである。その後、就職先の開拓も企図し、2つの目的を兼ね備えた学外幼稚園実習として今日に至っている。

次の表は各年度末の卒業生の実態である。

年 度	卒業者数	就 職 先				実習者 計 (%)	実=就
		幼稚園	保育所	施設	人		
1984	128	51	10	5	66 (52)	97	8
1985	105	51	7	6	64 (61)	91	11
1986	85	41	8	6	55 (65)	56	8
1987	161	48	25	11	84 (52)	88	6
1988	126	44	19	2	65 (52)	39	5
1989	96	22	21	6	49 (51)	31	1
1990	114	38	18	6	62 (54)	43	8
1991	150	49	34	3	86 (57)	51	16
1992	126	46	33	2	81 (64)	52	13
1993	111	34	35	7	76 (68)	40	6
1994	125	44	29	8	81 (65)	35	6
1995	135	46	37	5	88 (65)	91	11
1996	114	35	37	5	77 (68)	70	7

実習者：学外の幼稚園実習者数  
 実=就：実習先の幼稚園にそのまま就職できた人数

免許資格を活かした就職先の割合が、1992年度を境に5割から6割台に上がっている。これは幼児教育科本来の意味で好ましいのであるが、その背景にはバブル経済の崩壊と無関係ではない。1991年度以降の就職者は推薦入試を開始した時期であり、その効果には興味深いものがある。また、本学としての幼保関係のシェアは80人台と考えることもできようか。

当初は実力養成として多くの学生に実習を勧めていたが、就職を意識した実習は1990年度からである。就職となると需給の関係など様々な要因が絡んでくるため一朝一夕には事が運ばないのであるが、1991年度は就職率31%とかなりの成果がある。因みに、この年の実習が縁で保育所など関係施設を紹介してもらった者を含めれば、39%の実習者が就職に結びついている。以降、じり貧の感は否めないが、学生諸姉はこの教育実習の目的を酌んで有効活用すべきであろう。

さて、本稿では、実力養成としての実習の一面を実習中における音楽行動の実態アンケートから見よう。

幼児の音楽活動内容を大別すれば、うたう・ひく・うごく・きく・つくる、の5つに分類が可能である。ここでは、うたう活動とひく活動を取り上げ、実習中どの程度それにかかわったか、参加、指導したのみに関してのみ、回答を求めたものを記載する。換言すれば、幼児と行動を共にした音楽そのものの報告である。調査は1992年～1995年度学外実習者を対象とし、回答数82人であった。

うたう活動に関して

曲目、選曲方法、場面、演奏への配慮、表現へ

の配慮、伴奏、準備期間の項目について調査した。

うたうことに関して53人(64.6%)がかかわっている。曲数は全83曲である。一人最多で13曲扱っている。よく歌われるうたとして次の曲が上位にランクされた。

順位	曲 目	人数 (%)
1	おべんとうのうた	16 (19.5)
2	おかえりのうた	13 (15.9)
	まつぼっくり	
	どんぐりころころ	
5	とんぼのめがね	12 (14.6)
6	おはようのうた	7 (8.5)
7	さよならのうた	6 (7.3)

選曲方法としては、園(担任)の指示、自分で選択、子どものリクエストで、それぞれ59曲(延べ124曲)、32曲(延べ53曲)1曲となっている。大別すると次のようになる。

	手あそび	生活	行事	季節	その他	計
指定	4(6)	27(68)	3(3)	10(31)	15(16)	59(124)
自選	11(12)	-	-	7(23)	14(18)	32(53)
リクエスト	-	1(1)	-	-	-	1(1)
計	15(18)	28(69)	3(3)	17(54)	29(34)	92(178)

( )延べ数

複数回答の曲は以下のとおり。

指定：おべんとうのうた、おかえりのうた  
おはようのうた、さよならのうた  
まつぼっくり、どんぐりころころ  
とんぼのめがね、おかたづけ  
おねむり、空にらくがきかきたいな  
静かにするのは、よいこのあいさつ  
おきよおきよ、大きな栗の木の下で  
ゆりかごのうた、むすんでひらいて

自選：とんぼのめがね、どんぐりころころ  
まつぼっくり、いぬのおまわりさん  
ころころたまご

選曲の多くは、生活のうた、季節のうたとなっているのが分かる。多くの実習園が運動会シーズ

ンであるため、運動会前は、まず朝の会などでお決まりのうた(生活のうた、園独自のうた)と行事関係、運動会後は行事に変わって季節感のあるうたというようにパターン化できる。自選の根拠として、手あそびは導入として用いる。また、季節のうたは秋にふさわしいもの、その他は大学の授業の延長というのが相当数ある。ところで、4年に及ぶアンケートにもかかわらず、筆者が未知の曲は、生活のうたを除けば、わずか1曲のみである。多くの子ども向けのうたが創られているはずなのに、最新の曲がアニメソングだけとなっているのは残念であるといえる。

演奏への配慮では、実習生主体の視点から回答を求めた。結果は次のとおり。

楽譜どおり…………… 33人  
ことばを置き替える…………… 6人  
テンポに注意…………… 5人  
幼児の声域を考える…………… 4人

以下、少数派であるが、

曲が止まらないようにする、変奏する、メロディーだけは正確に、適当に左手伴奏を付ける、コード伴奏化する、自己流、ゆっくり(ことばと動作理解のため、初めての曲)、ピアノを間違えない、等々、  
となる。

表現への配慮は、幼児に期待する項目としている。内容は、

ことばを大切に…………… 17人  
リズムを大切に…………… 13人  
大きな動作など動きを主体に…………… 8人  
音程を正しく…………… 7人  
振りつけなどで楽しく、元気よく……………各6人  
テンポにノル、声の大きさ、顔の表情…各3人  
好きに歌わせる…………… 2人  
強弱感、ゆっくり…………… 各1人  
であった。

伴奏は、ピアノ(37人)、電子オルガン(4人)、オルガン(2人)など鍵盤楽器のみで、うたう活動中にリズム楽器は皆無である。手あそびを取り扱ったのが11人いるが、そこでも4人はピアノを伴奏として用いている。

概して、うたう活動にはピアノが不可欠であり、

楽譜どおり演奏しなければならないという思いが伝わってくる。準備期間として、当日、その場で(11人)、前日から(17人)というように、慌てないためにも不断の努力が望まれる。これは次の自己評価にも顕著である。

うたう活動の自己評価として、24人(45%)がプラス思考であり、10人は自画自賛している。その多くは、「自分は一生懸命やった」「子どもが楽しそうだからよかった」「回数を追うに従って上手にできた」というものである。一方で、36人(68%)は今後の課題を含めて記している。その内25人がピアノ伴奏に関するものを挙げている。主なものは、ミスタッチに関すること、鍵盤から目が離せないこと、事前の練習不足である。音楽のより具体的な回答は、音の高低変化と模倣活動の関係、子どもにあうテンポについて、子どもをリードしてうたうときの声の質について、丁寧な音楽の扱いかたなどがあった。代表的なコメントの一部を記載しておく。

「アニメソングは喜んで楽しそうにみえたが、大声で歌いすぎて音楽になっていなかったようだった。また、練習して完璧のはずだったが、少し間違えてしまったし、自分でリズムなど音楽的なことには注意がいかず、ただ一生懸命なだけだった」。

「朝に歌ううたは元気よく子どもの活動意欲をわかせるようにしてうたうべきなのだけど、緊張してしまいそこまでの配慮ができなかった。もっとみんなと楽しくうたえたらよかったと思う」。

「練習する日数が少ないため、ピアノを弾くことに必死になり、言葉がけを入れることがあまりできませんでした。園児の方を見ようとするとき音をまちがってしまい、何回も弾きこなすことが必要だと思いました」。

「メロディーだけしっかり覚え、左手をコードになおしたので、楽譜とにらめっこしなくても伴奏できた。うたっている時の子どもたちの表情をみながら伴奏できたのでよかったと思う」。

## ひく活動に関して

うたう活動と同様の項目について調査した。回

答数は12人(14.6%)。半数は運動会の行進練習への参加である。楽器の単独使用は1人で、残りうたう活動と重複している。

使用楽器は、小太鼓、大太鼓、タンブリン、シンバル、すず、カスタネット、鍵盤ハーモニカが複数で用いられている。手づくり楽器(マラカス)は1人。実習者の特技を活かしてヴァイオリン(森の音楽家の曲の歌詞に出てくるため)も登場する。

演奏、表現上の配慮として、打楽器はその持ち方、たたき方に先ずポイントを置いている。リズム的には、小節の第1拍目(使用曲:ふしぎなポケット)、拍(ドラえもののうた)、リズムパターン(運動会の行進曲)、うたの歌詞(おもちゃのチャチャチャ)に合わせて、タンタタという掛け声ないし身ぶりをういて子どもにたたくよう促すというものである。結果的には、タイミングよくたたくことにばかり主眼が置かれ、楽器の数、ニュアンスまでは配慮できなかったという。

鍵盤楽器では、指づかい、音階、4分音符(拍)にポイントがある。子ども全員が楽器を持っているケースでは、絶えず様々な音が鳴っているの、ゆっくり、みんなが弾けるようにするのに苦労している。

自己評価には、「準備期間が1日のため、たよりのない指導になってしまった」が「根気よく指導した」ら「ノリのよい感じで楽しんでくれ」「いろいろな楽器を入れると子どもは興味を持ち集中して活動することが分かった」ので「もっと積極的にすればよかった」とある。

うごく、きく、つくる活動に関して、それぞれ39人、22人、38人が回答しているが、音楽活動のカテゴリーから外れ、体育、製作的なことを記しているのが相当数ある。運動会シーズンであったとはいえ、うごく、つくる活動という表現が音楽の一部として認識されていない現実であろうか。きく活動に関してもBGM的な解釈があり、今回の主旨と異なるので、ここでは省略する。最後に、実習で役立った音楽関係の授業内容と実習までに取り上げてほしい内容を問いかけているので、その複数回答を列挙しておく。

#### 役立った内容

弾きうたい (13人), リトミック (12人)  
授業で扱ったうた (11人), ピアノ奏法 (6人)  
手あそび (5人), コードネームによる伴奏 (5人)  
リズムあそび (4人), 振りつけ (3人)  
模擬実習 (3人), 曲のアレンジ (2人)  
うたの指導法 (2人)

#### 希望する内容

うたの曲数を多く扱う (12人)  
ピアノ以外の楽器 (7人)  
弾きうたい (4人), 即興的伴奏法 (4人)  
年齢と指導内容, 言葉がけなどを含む実践形式の授業 (4人)  
うたを歌う (3人), 子どものうたの演奏 (3人)  
手あそび (3人), 声域と移調 (2人)  
ピアノ練習 (2人), 初見能力 (2人)  
鑑賞 (2人)

年度, 履修状況によって若干の隔たりは否めないが, 今後の授業の方向づけに貴重である。特に, 学修意欲旺盛かつ就職希望の強い学生が希望する内容は, 授業で扱ったにもかかわらず消化できなかった証であるとも考えられるので, 大きな課題となる。